

## ミュージアム研究員紹介

### 早川宗志主任研究員

早川宗志

ふじのくに地球環境史ミュージアムの植物分野を担当している早川宗志です。2018年4月1日付けで着任しました。専門は植物分類学です。野生植物の形態観察や新分類群の記載、そして、その由来を明らかにするための系統解析を行っています。世界には27万種にも種分化した維管束植物が存在しますが、その多様性が「なぜ生み出されたのか?」「植物種の違いにはどんな意味があるのか?」を明らかにするため、雑種形成の視点から種の進化に関する研究を行っています。

この「雑種形成」のテーマに取り組むため、学生時代は研究技術(人工交配)の習得を目的に農学部育種学研究室でイネの品種改良について学びました。しかし、研究室に配属され、いざ研究を始めると、自分がイネの花粉症であったことが判明しました。そのため、花粉を掛け合わせて次世代を育成する人工交配の作業では、くしゃみが止まらなくなり、アレルギーでまぶたが腫れてコンタクトがとれてしまう次第でした。年々アレルギー反応も強くなったことから、泣く泣く研究分野を変えることとなりました。自分の専門の分類群のことをペットタクサと言いますが、まさかペットタクサとの相性の悪さで研究分野を変えることになるとは夢にも思っていませんでした。イネ科植物に対するアレルギーは相変わらずですが、日本で一番知見が集積されているイネを対象に植物の基礎を学んだ経験から、現在ではイネ科、ラン科、サトイモ科、ショウガ科、ヒルムシロ科などのイネ科を含む単子葉植物を広く研究対象とすることができていると思います。

博士課程では、野生植物で起こる雑種形成を対象とした研究を行いました。植物種の11%は雑種由来の種分化によって進化してきたと推定されています。この雑種形成がもた



ラン科シュンランとカンランの雑種ハルカンラン  
(高知県高知市五台山牧野植物園；植栽)

らす進化的意義を解明するため、山野で雑種個体を探し求め、その雑種の形態・遺伝子・生態などを調べることに挑戦してきました。その結果、進化の原動力である雑種形成の比較研究をこれまで知られていなかった新雑種を含む複数の分類群で行うことができました。

このように、学生時代はイネの品種改良に取り組み、博士課程時代は野生植物の雑種を探しに野山を歩き回っていたことが現在の研究スタイルにつながっています。図鑑に載っていない変わった植物を捜し歩いているうちに、山野の植物に詳しくなり、新分類群の記載を行うようになりました。

今後は、静岡県の自然を対象とした研究と博物館活動を行っていきます。静岡県は日本に生育する植物種8000種のうち約半数4000種が分布しているうえ、伊豆半島には固有種も多く生育しているように種多様性が高い地域です。また、自然の恵みを活かした茶草場農法とワサビ栽培が世界農業遺産に選ばれています。このような静岡県特有の地域性を活かした研究を行うことで静岡県の自然の豊かさを明らかにし、ミュージアムで活動される皆様と一緒に調査・普及に取り組んでいきたいと考えています。